

# 唯，君ヲ愛ス

— 障害者プロレス「ドッグレッグス」というコミュニケーション —

You're Love of My Life

— The Communication of the Handicapped Pro-Wrestling "DOG LEGS" —

嶋 守 さやか

Sayaka SHIMAMORI

## はじめに

「しょうがいしゃの皆サマの，ステキすぎる毎日」。これが，筆者の研究のテーマである。本稿では，障害者プロレス「ドッグレッグス」についてまとめてみたい。主題は，障害者プロレス「ドッグレッグス」という「コミュニケーション」である。

障害者プロレス「ドッグレッグス」とは，1991年に北島行徳氏によって旗揚げされたプロレス興行を定期的に行う福祉ボランティア団体である<sup>1)</sup>。ドッグレッグスで筆者は，「障がい者と，同情を交えずにコミュニケーションを行うとはどのようなことか」というテーマのもと，同団体の設立15年を迎えた2006年11月より，月に一度か二度行われるスパーリングや大会試合での見学や，選手たちへのインタビューを主としたフィールドワークを現在まで続けてきた。本稿では，主に同団体設立初期の1993年からドッグレッグスの当事者としてレフェリー兼健常者レスラーをつとめてきた中嶋有木氏と，ドッグレッグスに参加した2007年より「聴流レスラー」として人気を集めている陽ノ道（宰堂陽道氏）のインタビュー内容より，ドッグレッグス活動の主旨，「なぜ，ドッグレッグスの活動内容

がプロレスでなければならないのか」ということ。また，障害者レスラーと健常者レスラーとがリングで闘う理由。そして，その試合や活動において行われ続けてきた「唯，君ヲ愛ス」という，「障害にかかわらず，人間として互いに相手と本気で向き合うコミュニケーション」について論じていきたい。

## I なぜ，障害者プロレス「ドッグレッグス」なのか？

### 1. 筆者が障害者プロレス「ドッグレッグス」でのフィールドワークに行くまで

筆者が卒業した金城学院大学大学院にて博士号を取得した後すぐ，指導教員であった西下彰俊教授，副田義也教授，川崎澄雄教授，鮎川潤教授のご高配により，筆者は岐阜県にある福祉系の大学での精神保健福祉実習助手としての就職が決まった。研究テーマが「高齢者の自己決定権と成年後見制度」であったため，高齢者の認知症や知的障害・精神障害についての知識がないこともなかった。しかし，文献調査を主とした研究であったため，実際の認知症や精神障害をまったく知らずに，

精神保健福祉演習の部分的な授業担当、実習指導と実習機関・施設と大学との連絡調整を行うことになった。

さいわい、その大学での就職以前に愛知県内のある精神保健福祉士養成校である専門学校で非常勤講師として勤めていた時の生徒たちが、赴任校であった大学の学生たちが精神保健福祉実習を行ったいくつかの病院や施設の実習担当者となっていたこと。また、日常業務として学生たちの実習指導者であったすべての精神保健福祉士の方々が電話での連絡のみならず、巡回指導中に精神病院や施設内を見学・説明を丁寧にして下さったこと。そして、実習巡回中に出会った患者さんや精神障がい者の方々の知り合いも増えたことで、筆者が行う精神保健福祉実習助手としての業務には、現実の障害や現場を知らないことについて生じるはずであったような支障は生じなかった。

就職して二年後、筆者は愛知県内にある現任校に赴任することになった。その頃、退職した前任校を卒業後、沖縄県の宮古島の地域生活支援センターに精神保健福祉士として就職したある一人の卒業生から連絡が入った。そこで、筆者は精神保健福祉についての現状や現場を知りたいという思いから、宮古島での精神保健福祉士実習調査を行うことにした<sup>2)</sup>。また、宮古島での調査と並行して、名古屋市内にあるK精神病院においても調査や認知症患者の方々へのグループワークを行った。その両調査より、認知症や他の精神障がいを総括する概念として「痴呆」とし、松野孝太郎氏によって展開される内部観測理論より、痴呆の患者さん達との日常的なコミュニケーション研究を行い調査報告書を作成した<sup>3)</sup>。

精神障がい者福祉や障がい者の方々との日常的なコミュニケーション研究を行うさいに、

筆者が特に意識していたのは、患者さんや障がい者の方がたとの日常であられる表情の変化、自信をもってされていくようになる行動の変化など、数量データとして有意義に数値化することが困難な患者さんの社会性の進歩や後退が、どのような科学的方法をとれば明確に示せるかということであった。それを探ろうと、研究フィールドに出かけては患者さんや障がい者の方々とコミュニケーションをとるうちに、筆者のなかに自分自身に対する違和感を明確に感ずるようになっていった。

その違和感は、「障がい者だから、しかたがないよ」という口には出さない筆者自身の言葉として示すことが的確であるように思われる。たとえば、こんな出来事があった。ある病院の喫茶室で、患者さんといっしょに喫茶店でお茶を飲んだ。遠近感を認識し、その認識にしたがった自身の身体の動きをうまくコントロールできないのか。あるいは加齢や障がいによる手の震えなどでか、コーヒーカップにこぼさずに砂糖が入れられない時がある、という認知症の患者さんがいた。気持ちが安定しているように見えるときにはできても、緊張などで気持ちが不安定になっているときは砂糖をテーブルにこぼしてしまっていた。テーブルを拭き取りながら、「今日はこぼしちゃったね。いいよ。こぼれちゃったのはしかたがないよ」とその患者さんに筆者が声をかけると、その患者さんは無言で泣き出してしまったのだった。

「しかたがないよ」という筆者の言葉は、障がい者や高齢者、あるいは子どもなど、社会的に立場が健常者に比べて弱い社会的弱者と接し、何か「できない」ことがあると必ず意識される感情でもある。しかし、こうした感情をもつたびに筆者は何かしらの違和感を常に意識することになった。普段のやりとりのなかでは、「同じ」人間であるとわかって

いる。しかし、何かそうした人達が「できない」という場面では、どうしてもその「しかたがないよ」という感情が出ることになる。そのたびに出てくる、「社会的弱者だから」という言葉にはあえてしない思い。しかし、社会的弱者であるということ、何が「しかたがない」のだろうか？あるいは、その感情が生じる気持ちの源は何であるのだろうか？そう感ずること自体が、親切心あるいは同情という差別なのだろうか？そういったことを考えては、その答えを見つけられずに何度となく筆者は思考の堂々めぐりを繰り返し続けていた。

## 2. 障害者プロレス「ドッグレッグス」初観戦からフィールドワークに行くまで

そんな折、友人二名とともに、障害者プロレス「ドッグレッグス」の試合を観戦することになった。その大会は、同団体の設立15周年記念大会であり、代表選手の対戦カードがすべて出そろっていた。その時の筆者の同団体についての知識は、次の一節程度のものでしかなかった。

人の心に湧いてくる親切心や同情もまた「自然」として、死ななければならぬ。それらは、同じように「自然」と湧いてくる優越心とセットになっているからだ。だから、「障害者」プロレスを主宰し、自らもリングに立つビッグバン・ボランティア北島は「障害者も、やればできるんだと思いました」「障害者の闘う姿に感動しました」「障害者がとても輝いて見えました」という観客の声を、「病的」なものに溢れかえる「自然」として憎む。観客もまた「自然」に対して死ぬために、障害者と健常者の「自然」な関

係を壊すために、「自然」に反するものとして観客が忌避するであろう「障害者対健常者の試合」を北島は敢行する。健常者は「日頃しているように、黙って障害者が苦しむのを見届け」ている、と挑発する<sup>4)</sup>。

観戦前の筆者は、「同情心が殺せるならば」などということは考えもしなかった。ただ、「相手が障害者だからこそ、手加減なくボコボコにする」という団体紹介のパンフレットに示されたアンチテーゼ北島（北島行徳氏のリングネーム）の選手紹介の一文には目がとまった。大会の前座試合となったのが、団体設立時からの古参レスラーであるサンボ慎太郎とアンチテーゼ北島との対戦で、サンボ慎太郎がアンチテーゼ北島に秒殺される結果であったため、「手加減なくボコボコにする」といったって、相手はやはり障がい者だからどうせ一方的にやられてしまうのでしょうか？しかたがないよね、弱いんだから」と筆者は思った。しかし、それはその大会のセミファイナルであり、後に「2006年のベストバウト」となったアンチテーゼ北島の対戦相手の鶴園誠との試合を見て根底から覆されることになった<sup>5)</sup>。

「スーパーヘビー級と無差別級の二冠王。これまでにタップをして負けたことのない絶対王者」とパンフレットに記された鶴園誠には、左脚が根本からない。17歳の夏に3ヶ月間、車椅子に座りっぱなしで家出をしているうちに壊死して切断することになったということを、後の鶴園誠へのインタビューで筆者は知ることになった<sup>6)</sup>。

「見慣れた競技であっても、片足や両足がなかったりする障害者が行くと、まるで別の競技のように感じられる」という北島氏のパラリンピックについての記述のように、筆者

は鶴園誠という「障害者の肉体をしっかりと見つめる」ことで、「欠損した肉体が生み出す不思議な迫力と、心地よい違和感から生まれる視覚的な面白さ」や「新たな快感」を確かに得た<sup>7)</sup>。しかし、そうした「視覚的な面白さ」や「新たな快感」よりも、「北島の重いパンチに苦しむが、一步も引くことなく闘い抜いた。究極のディフェンスにはまさに絶対王者としての風格が漂っていた<sup>8)</sup>」鶴園誠の試合での闘いぶり。そして、判定の結果、アンチテーゼ北島をあっさり下しても、喜びを表現するためのマイクパフォーマンスすら行わず、表情ひとつ変えずに無言でリングを後にした鶴園誠の姿に筆者は非常に驚いた。

ドッグレッグスのレスラーすべてが倒したいと思いつつも、なかなか倒せないほど強いアンチテーゼ北島に勝利し<sup>9)</sup>、「障がい者でも、やればできるんだ」という観客からの賞賛を得るための言葉を、筆者はその時の鶴園誠のマイクパフォーマンスに期待していたのだった。しかし、何も言わずに立ち去った鶴園誠に、筆者は「障がい者なのに、強い」のではなく、「鶴園誠は、強い」という認識を持つことになった。

ドッグレッグスの試合を観た後の感想については、映画『無敵のハンディキャップ』(1993年)の天願大介監督による次の言葉が多用される。「小人プロレス風の華やかな、芸能化されたスタイルを予想していたのだが、甘かった。楽しくもなんともない。むしろ見たくないものを見せられたと言った後味の悪さが残る。プロレスというより素人の本気の喧嘩、と言ったところか。しかも、脳性マヒの。見たくないでしょ、そんなものは」。天願監督はこうした感想を著書に記した上に、北島行徳氏にも対面で「あれは嫌がらせ」とはっきり告げている<sup>10)</sup>。

しかし、筆者が観戦したのは「素人の本気

の喧嘩」ではなく、まったくの障害者プロレスという「興行」であった。「障害者プロレスは、あくまで障害者のことを考えるきっかけの一つにすぎない。障害者とどう付き合っていくかは、結局それぞれの問題だからだ。だから、試合を見た後の帰り道に、障害者についていろいろと思いを巡らしてくれれば、それでいい<sup>11)</sup>」。北島氏の言葉どおり、試合観戦後の帰り道、筆者は障害者プロレス「ドッグレッグス」とは何なのだろう?、ということ。また、障がい者は何もかもが健常者と「同じ」であると考えなくてもいいのだからということで筆者自身が得た、言いようのない爽快感。そして、自分とドッグレッグスの選手たちが「“違う”ということを認め」、その上で覚悟と責任を持ってつきあう<sup>12)</sup>」ことを研究でやってみようという決意を固めたのだった。

## II なぜ、ドッグレッグスは障害者プロレスなのか?

——レフェリーおよび健常者レスラー・中嶋有木インタビューより

### 1. 障害者プロレス「ドッグレッグス」のルールとドッグレッグス批判

まず、ドッグレッグスというコミュニケーションという本題に入る前に、ドッグレッグスのルールについて簡単に説明しておきたい。ドッグレッグスでは1ラウンドがシングルマッチは3分3ラウンドか5分2ラウンド。タッグマッチでは、10、15、20、30、時間無制限で設定されている。勝敗はKO、TKO、ギブアップ、レフェリー権限によるレフェリーストップ、反則負けによって決定する。「相手を打撃技でノックアウトするか、関節技でギブアップを奪うかで勝敗が決定する。障害の

ある部位は攻撃しないなど、安全面を考慮した特別ルールもある<sup>13)</sup>」。2007年の5月に『Number』で取り上げられたドッグレッグスは、「総合化する障害者プロレス」として取り上げられている。「選手の多くがオープンフィンガーグローブをつけ、シューズなしの裸足という柔術スタイルで試合している」と報じられているように、プロレスというよりは総合格闘技としての色彩を深めた数々の試合が展開されている<sup>14)</sup>。

こうしたドッグレッグス独自のルールがあるほか、ドッグレッグスには通常の「プロレス」で容易に連想される悪役（ヒール）や場外乱闘がない。その理由について、レフェリー兼レスラーをつとめている中嶋有木氏にインタビューしたところ、中嶋氏はドッグレッグスにヒールがない理由について、次のように説明した<sup>15)</sup>。

現時点のドッグレッグスは、プロレスというより格闘技色が強い為、ヒールという概念自体が、お客さんの中で成立しにくいのではないのでしょうか？ なによりドッグレッグス的に、障害者に変に“キャラ付け”してしまうと、その障害者の素の部分（良くも悪くも）のリアリティがみえにくくなってしまうという事があるからだと思います。

本来なら、障害者と健常者の試合において、健常者こそが、障害者が社会的な自立を望む時に立ちはだかる壁の象徴として、ヒールである筈だったかと。健常者レスラーは容赦する事なく障害者レスラーを蹂躪する。そして、それでも障害者レスラーは何とかして、ある者は勝とうとし、ある者はせめて一太刀浴びせようと、何度も立ち向かっていくという図式。ところが、観る側の多くが健常者の

ために、また、障害者との向き合い方の一つとして健常者レスラーが支持された事、総合格闘技にシフトしていく中で、ルールの改訂が進んだ事、さらには障害者レスラーがアスリート化し、健常者レスラーより強い障害者レスラーが出てきた事で、それまでの図式が壊れた事もあると思います。

また、場外乱闘がないことについて、中嶋氏は次のように説明した。

場外乱闘は…あった気が…するんですが、いつ、誰が、といわれると怪しいです。タッグマッチでブルース高橋さんや（あらいぐま：括弧内筆者）ラジカルさんあたりだと思うのですが。昔はリングではなくマットだったので、結構勢い余ってというのはあったと思います。でも当時はレフェリーは一人（ジャッジはなかった）だったので、場外はほっといて、マット上の闘いだけに集中していました。

場外ブレイクの理由、経緯についてですが、床への転落を防止する為。また、場外乱闘は原則避け、勝負はマット上で、という不文律(!?)がある。基本的にこれらは昔から変わっていないと思います。特にリングを使用するようになって、転落は事故に繋がる危険性が高いので、技が決まりそうな場合を除いて、一方の選手がエプロンにでたら、早めにブレイクをかけています。

興行をはじめた当初はマットで試合をしていたドッグレッグスも、現在は中嶋氏の回答にあるようにリング上で試合を行うようになった。選手の障害に応じ、立って試合を行う選手をヘビー級、ヒザ立ちで行う選手をスーパー

ヘビー級、ほとんど寝た状態で試合を行う選手をミラクルヘビー級、健常者レスラーと障害者レスラーとが試合を行う無差別級として階級分けされている。無差別級においては、健常者レスラーが試合相手の選手の障害による身体状況に合わせ、上肢や下肢をドッグレッグス認定の拘束具で拘束する。

こうしたドッグレッグスのルールに基づき、さまざまな障害者レスラーや健常者レスラーによる試合が展開されるわけだが、レフェリーとして試合をとめるブレイクのタイミングについても、中嶋氏は「もちろん大怪我する前にとめるのは当然」であると安全面を考慮してのこと、と強調した。

しかし、まだギブアップをしていない選手の「力をどう引き出すか」という状況を考えなければならない面もある。「ちょっとぐらい技が決まってもまだ動けるといふ風に見えたら、試合は続行します。ただラウンドがつまっていて、お客さんのテンションがあがってここで止めたら面白いという時は、ちょっと迷うぐらいなら止めるというふうにしている。そのへんは、選手の気持ちと安全とお客さんの反応を同時に判断しなければならない。かならずしも選手の気持ちを考えてばかりもいられない。難しいんですよ。障害で痛みを感じない人もいますよ。健常者だったら決まっているんですけど、決まらないっていう場合があるんですよ。そういう時は止めないんですよ。どう考えても、なんでこんなところから手が見えるんだろうっていうのがあるんだけど、本人は全然痛くないとか。(笑)それは障害者プロレス独自のものですよね<sup>16)</sup>」。

興行の盛り上がりや試合の安全面が考慮されていても、障害者「プロレス」という活動内容ゆえに、ドッグレッグスは数え切れないほどの批判にさらされてきた。健常者が障がい者を容赦なく、ボコボコにするということ

以前に、「障害者プロレス」と名乗ることで、ドッグレッグスの障害者レスラーの母親からも、「身障者を売り物にしているような、そういう感じを私は受けた」という言葉を述べている<sup>17)</sup>。

「障害者の心理を巧みに利用し、売名に利用しているとしか思えない!」<sup>18)</sup>「都民の方から『都職員がレスラーとして興行に参加し、報酬を得ているかも知れないので調べてほしい』との情報が寄せられました」「本当のプロレスラーや他の障害者が迷惑している」「障害者のプロレスに会場を貸すな」「過去の大会で『格闘パラリンピック』というタイトルを使用しているが、国際パラリンピック委員会の規約に違反しているのではないか」。こうした批判は、障がい者から寄せられていたこともあった<sup>19)</sup>。

数々の批判に対して、北島氏は興行主催の覚悟としてレスラー自身による「障害者プロレスをやりたい」という意志を最大限に尊重し、レスラーとの「互いの合意の上で限界まで戦」った上での事故が起きたとしても、「責任はドッグレッグス代表の私にある」と言明している<sup>20)</sup>。また、「批判」に対して北島氏は、プロレスができるのは選手との信頼関係があつてのことだということを強調している。

いくらなんでも知らない障害者を殴れません。結局は個人と個人の信頼関係があるからできることなのです。障害者とボランティアの関係が全てドッグレッグスのようにあるべきだとは思いませんが、障害者と健常者のいい関係の一つだと思います。私たちの人間関係の中から出てきたのがプロレスだったわけで、表面しか見ない人には理解できないでしょう。個人と個人の信頼関係は、ボランティア

を「する側」と「される側」という線をなくした時に生まれてくると思います。ただ、健常者よりも障害者の方が体の衰えが早く来る現実にあたり、仕事がなくノイローゼになる姿を見たり、家族の考えと本人のやりたいことのギャップに悩んだり、厳しいこともあります。私もそうして親密につき合うことの意味が分かってきたのだと思います。

浪貝<sup>21)</sup>や慎太郎など、本当に頭に来る時があります。約束をやぶったり、人の気持ちを踏みにじることを平気でやりますから。しかしそうした駄目な部分も含めて、彼らのレスラーとしてのパフォーマンスに惚れ込んでいます。結局は個人と個人、お互いが魅力的であることが重要で、健常者と障害者の問題はあとからついてくることなのです<sup>22)</sup>。

## 2. 障害者プロレス「ドッグレッグス」のドッグレッグス・イズム

ドッグレッグスへの別の批判には、「障害者プロレスという言葉の響きから、障害者の見世物小屋を連想して、『障害者を見せ物にするなんてけしからん』という批判の声もある<sup>23)</sup>」。「『見せ物に出ませんか?』と障害者の人に呼びかけても『オレたちは見世物なんかじゃない!』と言って誰も出てくれず、今では見世物小屋には障害者は一人もいなくなっ」という現在<sup>24)</sup>、現代の見せ物という障害者の「表現」としてドッグレッグスを紹介する記事もある<sup>25)</sup>。

ドッグレッグスに対しての「見せ物」批判にたいして、北島氏のみならず、ドッグレッグスのメンバーもまた「堂々と見せ物だって言っていますけどね。見せ物で何が悪いって」と言明している。前項で示した中嶋有木氏の

言葉は、「プロレス」を見せ物として見せることについて、次のように分析している。

プロレスは「見せもの」っていうか、お客を意識しないと成り立たないものだと思う。お客さんがどういうふう期待しているのかを感じて、技のやりとりをして、最高のところで勝負を決める。見せ物的要素は、プロレスの前提で、障害者が見せ物に挑戦することが悪いのかな。

…(中略)…見せ物論を言う人は、たいてい自分の都合のいいところを言うわけですよ。芝居するとか絵を描くとかそういうことはすんなり受け入れるけど、プロレスということでそれを排除しようとする。自分の受け入れられないものを見せ物論にすりかえて言っているだけで、演劇なんかも否定した上で、プロレスとして見せることを否定するというなら話は別だけど、結局障害者を健常者にとって都合のいい存在に落ちつかせようとするような見せ物論だったりするんです。障害者でもそういう人がいて、一度ドッグレッグスでレフェリーをしていますと言ったら、見たこともないのに障害者が見せ物になるのはどうたらこうたら、プロレスというのはどうのこうのと。見てから物を言ってしまうね<sup>26)</sup>。

しかし、中嶋氏自身は在のドッグレッグスに対して、ある危惧を筆者とのインタビューで表明している。それは、障害者プロレスが興行として成功しているがゆえに見失われつつあるのではないか、という「ドッグレッグス・イズム」についてである。

今のドッグレッグスは何かこれでいいの? って常に思いながら、葛藤してる

かな。競技化してますよね。お客さんも見る目が肥えちゃって、必然的にこっちも受けとめなきゃいけないんですけど、最初の原点の「障害者にそこまでやっていいの？」っていう部分が希薄になってきちゃってる。「障害者が勝ってよかった、おめでどうでいいの？」って、時々腹立ったりイライラすることがありますよ。お客さんの反応がさわやかすぎる。

たしかに試合観ても、ルール改訂等によって、障害者が健常者にボコボコになるのが少なくなってきましたよね。じゃ、ドッグレッグスの存在意義って何だったの？ って、こっちが取り残されちゃったりすることがある。みんなリスク抱えてやってるじゃないですか。オブラートに包まれて、きれいになっちゃってる気がするんですよ。エンターテイメントとしては成功してますよね。ただ、何かやつつけ仕事になっちゃってるかなーって気もしなくもない。それは自戒をこめてっていう気持ちもありますけどねー。北島さんがどうしたいのかで決まってくるから、それは見届けたいなーって思う。

ドッグレッグスを観るからには、後味の悪さをお客さんに残してもらいたい。初めて観た人はけっこうそれを感じて、あからさまにするんですけど、そういうのがないのがちょっと怖いですねー。功罪両方なんですけど、リングって特別装置でしょ？ 特別なものとして望むと望まざるとにかかわらず、受け入れられちゃってる。実況がいらぬ試合が多くなってもいいかなって、思うところもあったりして。みんな実況が面白かったって、それって怖くないですかね？ 女社長さん（ドッグレッグスの実況：括弧内筆者）の言ってることを通して、もう後戻りで

きないのかなってのも、ちょっと思いませんけどね。愛人（ラ・マン）親子のからみで、何とか保ってるところもありますけど<sup>27)</sup>。

選手からドロドロしたパッションが感じられなくなりましたよね。入ってすぐ、14年くらい前にタッグマッチで浪貝さんが負けたんですよ。レフェリーストップをかけて。その時に浪貝さんが食ってかかって、「死んでもいいから続けさせてくれよー！」って。それがね、障害者自身の情念っていうか、ドロドロした、それでもやりたいっていうかを端的に表してたのかなーって思ってる。

死ぬかもしれないけど、好きなことをやりたい。こっちも（レスラーが：括弧内筆者）死ぬかもしれないっていう覚悟をするんですけど、『行ってらっしゃい』っていう、ちょっと危ねーよって言いながら、手を貸すんですよ。共犯というか確信犯的な覚悟っていうのは、障害者の情念と共鳴しちゃう。

こうした中嶋氏のインタビュー回答を受けて、筆者は現在のドッグレッグスのエースである鶴園誠の試合をドッグレッグスのレフェリーとしてどのように観ているのかについてたずねてみた。すると、中嶋氏は筆者が鶴園誠を非常に支持しているということもふまえて、次のように回答した。

最近、守りに入ってきちゃってる。自分よりでかい相手とか、何かそれでも闘おうとする情念っていうか、それが見えなくなってきたかなー。鶴園くんの試合でも、鶴園くんがセコンドと話してて、延長までしのげば勝てるぞっていう会話が聞こえてきちゃったりとかするとね…<sup>28)</sup>。



彼も口では言わないけど、色々抱えてるはずですけど、それでもやっぱり一番盛り上げてくれるのは彼だから。

でも、自分が面白くない。後樂園で格闘技を観てる感じ。自分は古いものにしがみついているだけなのかな。でも、これだけは絶対譲っちゃまずいのかなって。障害者の情念。それが、ドッグレッグスのドッグレッグスたる所以、ドッグレッグス・イズムだと思うんですよ。

### Ⅲ 「お前，愛してるぜえー」といって，殴ること

—— 聴流レスラー・陽ノ道インタビューより

中嶋氏のインタビュー内容に表れている「障害者の情念」というドッグレッグス・イズムをふまえ、筆者は中嶋氏に「現在の試合のなかで、その『ドッグレッグス・イズム』を残す試合は、どのカードだと思うか」という問いを投げかけてみた。すると、中嶋氏はしばらく考え込んだ後、「おとうちゃん<sup>29)</sup>の試合は好きかな。サンボ慎太郎対アンチテーゼ北島の試合って、年に一回は観たいですね。弱くてもいいんですよ。それでも観た人の何かをゆさぶるものがあるんじゃないかと思えますけどね。それと北島さんと闘ったときの、陽ノ道のくやしかった顔とか。陽ノ道くんも北島さんに勝ちたいと思っていて、何もできなかったっていう。その時にどう思ったのか。健常者に負けたことが悔しかったのか、自分の障害のこととか、力不足のこととか。わかんないですけどねー」と回答した。

そこで筆者は、中嶋氏にドッグレッグス・イズムを感じさせる試合を展開した陽ノ道に、アンチテーゼ北島との試合が決まったときに考えたこと、試合中そして試合後に考えたこ

と。今後の自身の活動や、陽ノ道が考えるドッグレッグス・イズムをたずねることにした。陽ノ道のインタビュー内容から、障害者レスラーとしての健常者への思い、「言葉がなくても通じ合える」という実感にもとづく、本稿の主題である「ドッグレッグスというコミュニケーション」について考察するに至った。

「ドッグレッグスというコミュニケーション」について論じる前に、まずは、中嶋氏がその試合に、ドッグレッグスが設立されてから今もなお選手に受け継がれているという「ドッグレッグス・イズム」を感じるという陽ノ道へのインタビュー内容を示したい。そこから、本稿のテーマである「ドッグレッグスというコミュニケーション」について後述する。

#### 1. アンチテーゼ北島との初試合，その後の試合について

陽ノ道は、2007年の4月のスパーリングからドッグレッグスに参加したばかりの新人レスラーである。参戦以前にドッグレッグスの試合を観戦し、その写真を自らのブログに掲載したことでドッグレッグスのメンバーの目にとまり、声をかけられたことから弟分の高王<sup>30)</sup>とともにスパーリングにやってきたのだった。

まず、筆者は陽ノ道にドッグレッグスに参戦することになったばかりであったのにもかかわらず、アンチテーゼ北島との試合が決まったときの思いと試合前、試合後の感想をたずねた。

陽ノ道「元々自分は文系だという自覚もあり、完全な傍観者気分が高王にやってみれば！とけしかけていました。ですがその後、北島さんより『ふたりいる方がいい』ということ

伝えられたときは、嬉しいながらもやっぱり動揺しました。そしてスパー、デビュー戦、北島さんが相手、等とトントン拍子に決まっていたために実感はまるでありませんでした。あっ、おれドッグレッグス出たのか、と我に返ったようにそう実感できたのはデビュー試合の夜、酒に酔って殴られた跡がびきびきと熱く痛んだときでした。どうも抜けきれないでいた観客気分が実試合によって一挙に抜けきったのだと思います。

試合前は、『あのドッグレッグスのリングにあがるのだぞ！ しかも相手はあの北島さんだぞ！』とっては自らを研ぎ澄ませていたと思いますが、今思うとやっぱり観客気分のままでした。要するにふぬけていたことは否めません。リングにあがってから試合が終わるまでについては、北島さんの目しか覚えていません。あの試合後は透明で、でも千々に乱れた心持ちで、あれこれ思う余裕なんてありませんでした。でも、赤い筆談ボードに書かれた内容は覚えていないのに、『ドッグレッグスへようこそ』という内容による北島さんの筆跡だけが深く刻まれたように覚えている。

雨の匂いがする。  
雷の予感がする。  
海の鳴声がする。

今日眼が潰れたから。

当時書いた文章です。これという明確な思いがあるわけでもなく、ただただ、おれは新しい感覚を知った、という興奮しかありませんでした<sup>31)</sup>

この「新しい感覚」について筆者がたずねると、自らの写真などの表現活動において、

陽ノ道は「対峙するその者や物を知りたいのです。言葉なんてほんとうにいらぬのだと、信じたのです」という思いを抱えていること。そして、その表現活動において陽ノ道自身が感じていることを、次のように回答した<sup>32)</sup>。

陽ノ道「どれほど文章を書いても写真を撮っても絵を描いても動いても、何も誰にもこれっぽっちも伝わってはいやしない、という感覚が常にあります。自分のなかにあるものを出しておかないと、この現世に押しつぶされてまるで気が狂いそうだという恐怖心、憤り、悲しみ。それは恐怖に近いものです。その恐怖を払拭するための手がかりのひとつとして、言葉がなくとも通じることもありうるのだ、ということを知りたいのです。そしてそのことをドッグレッグスの試合のたびに、これはどうやら信じられそうだが、と思うのです。それが新しい感覚ということです」

そこで、筆者は「言葉がなくとも通じることもありうる」ことを、デビュー戦で陽ノ道自身が感じたかどうかについてたずねた。

陽ノ道「デビュー戦のときは本当に実感がなくて観客気分が抜けきっていない心境のままだったため、そこまで思い至ることはありませんでした。試合後、おれがドッグレッグスに居るがための理由というものを考えたときに『言葉がなくとも通じ合えるのか』ということを考えました。今後の主題にしなければいけない、と思います」

陽ノ道は2007年10月13日に行われた第75回興行「RESULT」において、聴流の高王とともにアンチテーゼ北島とロリろり太<sup>33)</sup>とのタッグマッチで、勝利した。先の陽ノ道の回

答を得て、筆者は「ことばがなくても」、相手に何を通じ合わせたいのか？ と考えた。そこで、その内容を明らかにするために、筆者はデビュー戦の次の試合である対戦相手に対して陽ノ道自身が感じたことをたずねてみた。

陽ノ道「次にろり太と会ったとき、『おまえ、愛してるぜー』という心持ちで接するだろうと思います。言い換えれば距離感が縮まった、ということです。ただ何十時間とたっぶり時間をかけて言葉を使って深くじっくりと会話をしてきたときに感じられる満足感と等しいのです。実際の試合はたかだか10分にも満たないはずなのに。明らかに試合前にはまるで無かった感情です。これが『言葉がなくとも通じ合える』ということなのかな、この試合で見えてきたように思います。とはいえ、そう思える情感ができたということが、単純に、うれしいです」

## 2. リングで健常者レスラーと見つめ合うということ

前項で示した陽ノ道へのインタビュー内容において、筆者はレスラーがリングの上で見つめ合って試合をすることで感じられる『おまえ、愛してるぜー』という感情。あるいは、『言葉がなくても通じ合える』ことについて、さらに陽ノ道にたずねることにした。

「言葉がなくても」、リングで見つめ合って試合をすれば「通じ合える」。その瞬間に交わす攻撃内容について明確な記憶が残っていなくても、見つめ合った相手の目は覚えているという感覚が残る。陽ノ道の回答内容をそのように解釈した筆者は、陽ノ道に改めて「見つめ合う」ことで得られた感覚を確認するために、まずはアンチテーゼ北島に陽ノ道

の何を見つめられたと感じたかをたずねてみた。陽ノ道はその質問に対し、次のように回答した。

陽ノ道「何か、といわれるとわかりません。別段見られているというふうには感じませんでした。『見つめ合う』ということの意味が心の芯から理解できたと思っています。年齢差も障害云々も何もかもが抜きであいつとおれは対等にいる、という境地での見つめ合いです。

当時北島さんは肺炎寸前の状態だったことを試合後に知りましたがそういったこと、おれの初試合だということ、またおれは五体満足で身体面に関しては北島さんとなんらかわりないということ（つまり対等に殴り合えるということ）、それらすべての緊張感がお互いにとって良い方向に転んだのだと思います。この感覚は到底言葉で言い表せぬくらい非常に貴重なものだと思います。

愛人（ラ・マン）や慎太郎たちがぼろぼろになって、一種の比喩とかではなく、本当の無による死に近づいて、それでもなお北島さんと闘いたいと思う気持ち、あれはパフォーマンスなんかではなく本当に『本当』だった、と信じられたことを嬉しく思います」

「年齢差も障害云々も何もかも抜きであいつとおれは対等にいる」という陽ノ道の回答で、筆者はリングの上の健常者レスラーであるアンチテーゼ北島と、普段の生活で出会う健常者への意識に違いがあるのかどうかについて確認したいと考えた。それは、普段の生活で出会う健常者に対して、「年齢差も障害云々も何もかも抜きであいつとおれは対等にいる」という感覚が、障がい者である陽ノ道が得られるものなのかを確認したいと考えたためである。そこで、筆者は「陽ノ道にとって、健

常者とはどのような存在なのか？」とたずねることにした。その質問に対して、陽ノ道は次のように回答した。

**陽ノ道**「五体満足がゆえに人間としてシャープになるための手がかりが広すぎて大変だよなあ、と思います。おれという障害者から見ると、家庭の事情などの第三者による影響はともあれ、己の限界や出来ること出来ぬことについて思い煩う機会が少なくなる、または遅くなりやすいのは確かだと思っています。

障害者で何か行動を起こしている人というのは計らずとも障害を利用している面がありますし、健常者でも行動を起せる人というのは自らの壁、つまり表面に表れているいらないに関わらず自らの障害について考えてきた人だと思います。けっきょくは障害者、健常者どちらも己の中のざらざらした部分を撫でて生きてきているのだと思っています。なので広く人間的な意味において違いはさほど感じてはいません。ただ『健常と信じこんでいる健常者』はまったく鼻持ちならないな、とは思いますが。

とはいえ健常者という名の不特定多勢に押されてしまうとき、まるで自分が消えてしまったように感じて無性に辛くなる時があります。多勢というものは悪意のない悪意が産まれやすいので本当にくせものだな、と思います。」

陽ノ道の回答にある「ただ健常と信じこんでいる健常者はまったく鼻持ちならないな」と思うこと。そして、「健常者という名の不特定多数に押されてしまうとき、まるで自分が消えてしまったように感じて無性に辛くなる時があります。多勢というものは悪意のない悪意が産まれやすいので本当にくせものだな、と思います」という回答にみられる陽

ノ道の「健常者観」は、アンチテーゼ北島にも感じられることなのかを、筆者は上記の問いに続けて質問することにした。そのように質問することで、健常者レスラーであるアンチテーゼ北島と試合で向き合うときと、普段の生活で健常者と接するときの違いがあきらかになるかと考えたのだった。

すると陽ノ道は、「質問の意図がよくわかりません。上記のおれの考えと何故北島さんがむすびつくのでしょうか。単純に五体満足なので健常者になると思います」と回答した。そこで、筆者は再度、「北島さんは『単純に五体満足』な『健常者』ではありませんが。リングで闘っているときの北島さんは、陽ノ道が『健常者という名の不特定多勢に押されてしまうとき、まるで自分が消えてしまったように感じて無性に辛く』させられる、『不特定多数』の『健常者』であるのかどうかをたずねてみた。その質問に対し、陽ノ道は次のように回答した。

**陽ノ道**「リングに上がり、一対一で見つめ合い、おれの拳でぶん殴り、そして北島さんの拳でぶん殴られる。不特定多数だとか個人だとか、健常者とか障害者とか、健常者なんてありえないとか、障害があってもなんでもできるとか、そんな糞面倒くさいこと全部すっば抜きで、リング上にいるのはただただアンチテーゼ北島であったと思います。

殴り合うということは、あまりにも野蛮で根源的で、だから『こんなにも善意に満ちていて、何故こんなにも善意を出せているのかと、こんな善意、裏には何かあるかわからまいぞ』と疑いを持たざるを得なく、そして反逆の手段が悔しくも乏しい障害者に、とても、沁みるのだと思います」

陽ノ道へのインタビューの最後に、筆者は

陽ノ道が考えるドッグレッグス・イズムはどのようなものか。また、それをどこから着想したのか。そして、自身のうちにあるドッグレッグス・イズムについてたずねることにした。

陽ノ道「それでもなお、しぶといしたたかさ。（着想したのは、）慎太郎と北島さんの長年続いている関係。そして、その『それでも尚しぶといしたたかさ』は、ドッグレッグスのレスラーみんなから感じる。今の自分のなかで、まだ闘ってないレスラーさんがたくさんいるので写真30%、プロレス70%を占めている。ドッグレッグスにおけるプロレスも写真も、対峙するその者や物を知りたい、という欲求から動いているので、その大本において違いはありません。ただ、自分の撮った写真を見て、未だ定まりきらないところがあるけれど、どうも『踏まれてなお、しぶといしたたかさ』というものが底に見えるように思っています<sup>34)</sup>」

#### IV 障害者プロレス「ドッグレッグス」というコミュニケーション

##### 1. 「受ける」ということ

「ただ、対峙するその者や物を知りたい」、あるいは「ことばがなくても、通じ合える」ことを信じたいという願いに限りなく近い思い。また、「リングにあがり、一対一で見つめ合い、おれの拳でぶん殴り、そして北島さんの拳でぶん殴られる。不特定多数だとか個人だとか、健常者とか障害者とか、健常者なんてありえないとか、障害があってもなんでもできるとか、そんな糞面倒くさいこと全部すっば抜きで、リング上にいるのはただただアンチテーゼ北島であった」という実感。そ

して、ドッグレッグスのみんなから感じられる「踏まれてなお、しぶといしたたかさ」。これらが、陽ノ道のインタビューによって得られた陽ノ道のドッグレッグス・イズムであった。

新人レスラーの陽ノ道がドッグレッグスのリングで体感したドッグレッグス・イズムは、北島氏がドッグレッグスを旗揚げする契機となった最初の殴り合いを北島氏の目の前で行ったサンボ慎太郎がアンチテーゼ北島に挑戦状を叩きつけた1992年の10月18日の興行、「原点回帰」に端を発する。「障害者だってやればできる」ことを示し、その結果がどうであれ拍手を送る「障害者賛歌」ではなく、試合を受けて欲しいと切望したサンボ慎太郎との対決が「原点回帰」のメイン試合となった。

「私がリングに上がったのは、慎太郎が挑戦してきたからなんです。真剣に闘って欲しいと思っている相手に対して、手加減をしたら失礼だと思うんです<sup>35)</sup>」。「真剣に闘って欲しいと思っている相手に対して手加減をしたら失礼だ」というアンチテーゼ北島の闘いの姿勢は、2007年1月13日に行われた第72回興行「15-3」のメイン試合となった、「ほとんど寝た状態で」試合を行うミラクルヘビー級の選手である愛人（ラ・マン）との対戦でも「約束通り、手加減なしで闘いましたよ」と貫徹された。

「障害者ととことんまで向かい合う。そんな考えから、障害者対健常者という対戦カードは生まれ、ドッグレッグスを象徴する闘いとなっていった。旗揚げから何年経とうと、この思いだけはゆるがない」。しかし、対戦相手の選手の戦闘能力に合わせて、両手両足を拘束して試合に臨んだアンチテーゼ北島と、愛人（ラ・マン）との試合は1ラウンド2分11秒、アンチテーゼ北島によるTKOで決着した。試合後、「顔面から血を流している愛

人を見て、とてつもなく胸が痛くなった。慎太郎のように頑丈だけがとりえの障害者ではない。相手はいつ死んでもおかしくないような重度の障害者だったのだ。それでも私は障害者が望む限りは応えなければならない<sup>36)</sup>。愛人(ラ・マン)は「ありがとう」と、アンチテーゼ北島の思いを受けて応えた。その光景を写真におさめた陽ノ道が、その直後の試合でアンチテーゼ北島と向き合った。障害者がアンチテーゼ北島と闘いで向き合うことを望み、健常者であるアンチテーゼ北島が「手加減なしで闘う」ことで試合を受け続けてきたのだ。

「障害者と健常者は違う、ということ表現するために障害者と闘い、結局、障害者・健常者という区別がない状態に(ほんの一瞬だけ)達する<sup>37)</sup>。かつてのアンチテーゼ北島も、「慎太郎と闘うことで、私は何度か一心同体になったような感覚を覚えたことがある。日常生活では理解できないことが多々あっても、リングの上では気持ちを通じ合わせることができた」。

試合では「通じ合えた」と実感できた相手でも、通じ合えなくなる現実もある。「通じ合えても、通じ合えない」ことは、選手だけでなくドッグレッグスを観続けるファンにも伝わっている。「何度やっても勝てないことを、圧倒的に目線の高さが違うのだということを見せつけるファイトも、良いと思う。通じ合えないなら、何度だって通じ合えないということを見せ付けてほしい。昔は通じ合っていた健常者と障害者が通じ合えなくなることだってあるということ、何度だって見せ付けてほしい<sup>38)</sup>」。

しかし、通じ合えることも通じ合えないことも、互いが互いを受けることでしか成立しえない。どんなに総合格闘技化しようが、ドッグレッグスが「プロレス」を名乗るのは、相

手を真正面から「受ける」ことで成立しているためだ。「プロレスの基本は、『受け身』にあると言われている。まず相手の技を受ける。それをやらないと試合は成立しない。受け身とは“礼”のことである。『礼に始まって礼に終わる』という武道の諺があるが、あの礼のことである<sup>39)</sup>」。北島氏は、アンチテーゼ北島として、障害者からの挑戦に手加減なしで闘うという「礼」を尽くし続けてきたのだ。

「障害者がプロレスをする」ということ以前に、「格闘技は苦手だ」という格闘技に対する生理的拒否反応ともいえる批判にも、筆者がドッグレッグスのフィールドワークを行っている最中に出会った。それは、格闘技全般に期待され、そして格闘技全般に連想される「リアルファイト幻想」とも関連している。「観戦者が格闘技に求める興奮や憧憬の源は、“死の戦慄”である」という見方も確かにある。しかし、格闘技は戦争や殺戮ではないし、格闘家は殺人鬼でも暴行犯でもない。人々が格闘を観戦し、喝采し、そして闘う者たちが人々の憧憬を一身に集めるのは、ただの喧嘩といった「自然状態でもなければ、戦場でもなく、ただ一つ儀礼的な競技空間においてのみなのである」。つまり、「格闘技に<見せる>という要素が加わった瞬間から」、格闘は格闘技になるのである<sup>40)</sup>。

プロレスは格闘技である。しかし、プロレスをプロレスたらしめているのは他でもなく「受け身」である。それは、殺戮といった「最後まで突き進もうとする『欲動』の自発的制御」であり、「自分で自分を邪魔する『欲望』に踏みとどまる手立て」である<sup>41)</sup>。それは、技を受けることができる強さをもつ選手にしか使うことを許されない特権とも言わなければならない。受け身を取れないことは「未熟さ」であって、「相手の技を受けない『真正さ』や『純粹さ』、もしくは『強さ』」

と混同されてはならない。「相手（の競技者生命）を終わらせるような技を駆使する者」は、「未熟者」ないし「素人」とみなされる<sup>42)</sup>。

ドッグレッグスの選手もみな、その特権を手に行っている。選手は相手の技を受けられるから、闘うのだ。障害者だから、手加減なしにボコボコにする。そうした健常者レスラーが果たすプロレスとしての礼により、ドッグレッグスにおいても「リングの中の相手は、次々とアクセルとブレーキを踏み続け」るように格闘技を展開する。そこには、攻撃する選手は相手が技を受けられること、そして自身も技を受けるといふ「とりあえずもう相手を信用するしかない<sup>43)</sup>」、あるいは「とことんまで相手を信頼する」という時空間が現れる。それゆえに、陽ノ道が「ことばがなくても通じ合えた」という実感を、「本当なんだ」と体感したのである。障害者プロレスを通して得られた陽ノ道の体感が、障害者プロレス「ドッグレッグス」というコミュニケーションであり、ドッグレッグスの原点から、対アンチテーゼ北島戦のみならず現在のどの試合にも変わらずにそこにある、「ドッグレッグス・イズム」なのである。

### おわりに

障害者プロレス「ドッグレッグス」が築き上げてきた時空間に存在し続けてきた「ドッグレッグスというコミュニケーション」をここまで見てきた。それは、プロレスを通して障害者レスラーと健常者レスラーが、言葉なしで通じ合える境地である。本気で向き合い、殴り合えるほどの信頼関係。これまでにドッグレッグスを描こうと試みてきた者たちが、その関係への「嫉妬」で書くことを諦めてしまうほどの緊密な人間としての結びつき(44)。「何よりも心の交流と融和が必要」とされる

健常者と障害者とが共同して行う社会的な活動や表現活動において実現が目指されることでもある<sup>45)</sup>。

リングを舞台にたとえてその活動の相同性を探ろうとするならば、劇団態変を主宰する金満里氏を「暗い気分」にさせる「障害学」として、障害者プロレス「ドッグレッグス」を見ることも可能だろう<sup>46)</sup>。しかし、金氏の文章より劇団態変とドッグレッグスとの違いをみるならば、団体における障害者と健常者との関係は明らかに違う。劇団態変において、健常者は「役者の身体を抱えて運ぶ黒子」に徹し、「それまでの本番で役者たちが命がけで舞台上に築いた作品の芸術性をくもらせる『雑音』」となったり、「『心温まる裏方』」というような情感を観客に与えないとしている<sup>47)</sup>。

ドッグレッグスでは、健常者もレスラーとしてリングに上がり、対峙する。また、観客によっては「心温まる裏方」として映るレフェリー、スタッフ、介助者の存在もドッグレッグスの表現活動を担う表現者である<sup>48)</sup>。さらに、そのドッグレッグスの表現を消費する観客も、障害者プロレス「ドッグレッグス」というコミュニケーションの共謀者である。ターザン山本氏ならば、ドッグレッグスにかかわるすべての人たちを「一味」と呼ぶだろう。障害者プロレス「ドッグレッグス」もまた、「時間と空間から招待状をもらった時、初めてプロレスはそこに存在することができる」からである。

ターザン山本の言う「一味」とは、「味方」にすること。またその人々。仲間。同志。現代では特に悪事の集団にいう。プロレスラー、あるいはプロレスに集う人々が「悪事の集団」であるとターザン山本氏は言いたいわけではない。「悪いことをするという事は、秘密の世界、たくらみの世界」であり、一味には

その世界で<真実>を語る言葉があまり必要とされない<sup>49)</sup>。

プロレスラーはリングでプロレスし、「言葉がなくても通じ合える」世界を展開する。「言葉以前の何か、言葉以上の何か」が技として、あるいは選手独自のパフォーマンスとして表現される。その世界に集うプロレスファンがプロレスを消費しようとするれば、必ずそのプロレスに潜在的に存在している「言葉以前の何か、言葉以上の何か」という「過剰性」を試合に読んでしまう。それは言葉以前の、あるいは言葉以上という言語化されない何かを読めるという「真に反語的なプロレスは、ファンの想像力を誘発する仕組みになっている<sup>50)</sup>」ためだ。リングを降りてプロレスラーが言葉を語っても、その言葉はすべて「プロレス」の試合を読むための「素材」となり、それを糧にプロレスファンの想像力はさらに力を得ることになる<sup>51)</sup>。

障害者プロレス「ドッグレッグス」においても、数々の試合や関連の著作で「プロレス」を読むための素材が提供されてきた。本稿でも北島行徳氏が執筆した「素材」をもとにまとめてきたが、設立15周年を区切りとし、北島氏はドッグレッグスについての執筆を停止している。その停止は、ドッグレッグスに対するすべての解釈をファンに一任し、それをすべて「受ける」というファンに対するドッグレッグス・プロレスラーとしての礼なのかもしれない。

言葉があっても、なくても、そこで伝わる「過剰性」から通じ合える、障害者プロレス「ドッグレッグス」というコミュニケーションは、ドッグレッグスがその歩みをとめないかぎり、ドッグレッグスの共謀者により、これからもずっと続けられていく。筆者はそのコミュニケーションの一味に今後も加担していこうと、心に決めた<sup>52)</sup>。

## 註

- 1) 障害者プロレス「ドッグレッグス」の設立経緯は、北島行徳『無敵のハンディキャップ 障害者が「プロレスラー」になった日』文藝春秋、1997年に記されている。
- 2) その詳細については、拙著『せいしんしょうがいしゃの皆サマの、ステキすぎる毎日』新評論、2006年を参照されたい。なお、本稿ではドッグレッグスについて言及する場合にのみ「障害者」、またドッグレッグスとは無関連な場合においては「障がい者」という表記を用いる。
- 3) 痴呆の内部観測研究会『痴呆の内部観測研究会研究報告書』2005年度桜花学園大学特別研究費助成、2006年。
- 4) 柿本昭人「光を聴け！ 声を見るな！」『現代思想』第30巻第3号、2002年2月、120頁。記述にある「ビッグバン・ボランティア北島」はアンチテーゼ北島である。天願大介『無敵のハンディキャップ製作ノート』青林堂1993年によると、サンボ慎太郎は「最低最悪のボランティアを自負する健常者レスラー。得意は反則技。障害者に対して血も涙もない攻めをひたすら繰り返す卑劣漢である。『障害者レスラーを完膚なきまでに叩きのめして、現代社会の覇者は健常者なのだ』という事実を見せつけてやる』と放言して憚らない、究極の悪役（同書27頁）として紹介されているビッグバン・ボランティアを1992年8月23日に行われた第6回興行「ボランティア敗戦記念日」にて下し、同年10月18日の第7回興行「原点回帰」にて、アンチテーゼ北島と対戦することになった（天願1993年、152頁）。
- 5) 「Super handicapped Pro-Wrestling DOG LEGS 2007」（障害者プロレス「ドッグレッグス」パンフレット）2頁。
- 6) 鶴園誠は、1999年7月18日に行われたドッグレッグスのスパーリングより活動に参加し、同年9月25日の興行にてデビューし今年で活動9年目である（北島行徳「超障害日記vol. 9」『月刊いのちジャーナル』1999年10月）。
- 7) 北島行徳「障害者プロレスの愉楽」『木野評論』第31号、2000年3月、73頁。
- 8) 「Super handicapped Pro-Wrestling DOG LEGS 2007」（公式パンフレット）1頁。
- 9) 筆者が観戦した大会以前に、2002年3月31日に行われた第54回興行「アフォーリズム」のD-



- 1 トーナメント2002（膝立ち選手によるトーナメント形式の試合：括弧内筆者）にて、鶴園誠はアンチテーゼ北島を決勝戦で下して優勝している。また、シングル戦でアンチテーゼ北島を下した選手に、1996年全日本車椅子アームレスリング選手権優勝、2001年全日本パワーリフティング82.5キロ級優勝者で、ベンチプレスでマックス155キロを記録する高橋省吾（北島行徳「超障害日記22」『いのちジャーナル essence』2002年3月、24頁、および北島行徳「聖人じゃない人間だ！ 第88回 北島引退を決意か？」『記録』第266号、2003年1月、8頁）、身長190センチ体重110キロという「本物のプロレスラー並」の巨体レスラー、ブラインド・ザ・ジャイアント（北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第109回 全盲レスラーが北島撃破！」『記録』第287号、2004年10月、10頁）、そして2006年7月21日に行われた「15-2」の興行で鶴園誠に敗れ、引退表明したウルフファンクがいる。
- 10) 天願大介1993年、7頁。ドッグレッグスの観戦後の「後味の悪さ」については、「面白さのバクトル」として北島氏が次のように説明している。「面白いプロレスが見たければ、普通のプロレスで見た方がいい。もっと言えば、バーリトゥード[何でもあり：括弧内筆者] だって総合格闘技系のイベントなどで観戦した方がいいに決まっている。体の大きさ、受け身のうまさ、技の迫力、本物の技術と、当然のごとくその道のプロと比べられれば歯が立たない。…（中略）…常連の観客は障害者プロレスを見て、『日頃の憂さを晴らしてスッキリしたい』と言う。その気持ちもわからないでもないが、日常のストレスを発散するものに、なぜわざわざ障害者プロレスを選ぶのだろうか。…（中略）…ドッグレッグスの面白さの質は、イベントとして完成度が高くなりつつある今でも、『後味が悪く、欲求不満が残るもの』であり、『観客に想像を働かせてもらう』ことで成立するものだ。もちろん、私たちもお金をもらって興行を行っている以上、観客を楽しませることは忘れてはいけない」（北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第62回 生きざま映す試合」『記録』第238号、2000年9月、12頁）。
- 11) 北島2000年3月、77頁。
- 12) 北島行徳「伝言ダイヤルから恋愛へ。いろんな恋の形があるから、諦める必要はないと思う。」『ダ・ヴィンチ』第65号、1999年、151頁。
- 13) 北島行徳『ラブ&フリーク——ハンディキャップに心惹かれて』文藝春秋、2000年、および北島行徳2000年3月、75頁。
- 14) 藤木TDC「スポーツ裏の穴26 総合化する障害者プロレス」『Number』第678号、2007年5月、120頁。「障害者による格闘技ルール」としての試合については、2007年12月6日発行の『ナイスポ』の第8面でも、「福祉と各党議の…異文化交流戦 新宿バトルエイドvol.1」として取り上げられている。
- 15) 中嶋有木氏が障害者プロレス「ドッグレッグス」に入団した経緯については、障害者プロレス「ドッグレッグス」メンバー&介助者のみなさん／究極Q太郎+小倉虫太郎+神長恒一（聞き手）「自立とプロレスの両立」『現代思想』第26巻第2号、1998年、69頁を参照のこと。
- 16) 同上71頁。ドッグレッグスのレフェリーは中嶋氏の他にも現在3名いるが、なかでもドッグレッグスの選手である遠呂智（2003年4月26日の興行にて行われた公開入団テストで、「女子高生レスラー」としてデビューし、大学を卒業した現在も活躍する妖怪レスラー。公開入団テストについては、北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第92回 無敵の女子高生レスラー誕生」『記録』第270号、2003年5月、10頁を参照されたい）によれば、中嶋氏は「最も選手の戦意を尊重し、試合を盛り上げる最高のレフェリー」と絶賛されている。
- 17) 天願大介1993年、101頁。「身障者を売りもの」にすることを嫌悪感、その障害者レスラーの母親の「障害は私が作ったと思っていますから。あの、そのことに責任負わなくてはいけないと思っています」という思いから生じていることが同書122-125頁より重く理解すべきことである。『弾むリング 四角い「舞台」がどうしても必要な人たち』（北島行徳、文藝春秋、2002年）を上梓して以後の北島氏も、この母親の思いを「ただの過保護ではなく、「母親の自責の念は相当なものだったはずだ。子供が自分の手を離れるまでは、私も『なんとしても子供を守らねば』と思うだろう」（北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第122回 突然ですが、わたしは『ドッグレッグス』をやめません。」『記録』第300号、2005年11月、9頁）と受けとめている。

- 18) 北島行徳「聖人じゃない! 人間だ! 第106回 激論! ドッグレッグスはプロレスか?」『記録』第284号, 2004年7月, 8頁。
- 19) 北島行徳「聖人じゃない! 人間だ! 第112回 リングに引っ張りあげたい『クレーマー』」『記録』第290号, 2005年1月, 9頁。
- 20) 北島行徳「聖人じゃない! 人間だ! 第95回 地方興行の収穫」『記録』第273号, 2003年8月, 8頁。障害者と限界までプロレスで闘うことについては, 2003年6月28日に行われた仙台での地方興行主だった実行委員会によっても実践したいという強い要望があった。その詳細については, 北島行徳「聖人じゃない! 人間だ! 第94回 『売り興行』のジレンマ」『記録』第272号, 2003年7月, 8頁を参照のこと。
- 21) 獣神マグナム浪貝, 一時引退後, 欲獣マグナム浪貝。天願大介1993年, 26頁に, 「第2代チャンピオン。脳性マヒ。プロレス活動とは別に『つめ隊』の名でロッカーとしても活躍中の異色マルチ障害者。93年, ビデオ・クリップ集『障害者はおまえだ!』で衝撃デビュー」との記載がある。また『Tarzan』第170号, 1993年7月, 97頁のドッグレッグス紹介記事でも, ドッグレッグスは浪貝と「その仲間たち」と紹介してされている。現在, 浪貝はドッグレッグスを引退している(詳細は, 北島行徳「聖人じゃない! 人間だ! 第91回 スターの素質の持ち主」『記録』第269号, 2003年4月, 8頁を参照のこと)。
- 22) 北島行徳「遊学インタビュー30 信頼関係の上にプロレスができあがった」『レクリエーション』第483号, 1999年, 47頁。ドッグレッグスの歴史には障害者レスラーのジャイアント馬場子(千野恵子氏)の死もある。ジャイアント馬場子のドッグレッグス入団への経緯は, 障害者プロレス「ドッグレッグス」の皆さん他1998年, 67-68頁。ジャイアント馬場子の他界については北島行徳「聖人じゃない! 人間だ! 第135回 千野の死・カッコイイ試合などなかったけれど」『記録』第313号, 2006年12月, 6頁に記されている。
- 23) 北島行徳2003年3月, 76頁。
- 24) ホーキング青山「ホーキング青山の傍若無人 第15回 見世物小屋によくこそ!」『創』第33巻第8号, 2003年9月, 78頁。
- 25) 愛咲なおみ「障害者と表現」『トーキングヘッズ叢書(TH series)』第29号, 2007年2月, 92-93頁。
- 26) 障害者プロレス「ドッグレッグス」の皆さん他1998年, 71-72頁。ドッグレッグスの見世物論的批判に対して, 生瀬克己は「現代の障害者たちの意識状況や達成願望について, すべての『観衆』が理解・共感しているわけではなからうから, 彼ら障害者の『身体的営み』のなかに, かつての見世物的世界を連想してしまう人たちがいるかもしれない」と示しながら, 「障害者自身が, 『ひとりの主体者として, 自ら『見せる』立場を明確にしつつある』ことについての論考をまとめている(生瀬克己「見世物芸と障害者 『見られる』存在と『見せる』存在をめぐって」鶴飼正樹+北村皆雄+上島敏昭『見世物小屋の文化誌』新宿書房, 1999年, 78-79頁)。
- 27) 愛人(ラ・マン)家族の試合カードは, ドッグレッグス15周年記念興行である「15」では愛人(ラ・マン)対ミセス愛人(ラ・マン)の夫婦対決(詳細は, 北島行徳「聖人じゃない! 人間だ! 第125回 こんな理由で闘うってアリか?」『記録』第303号, 2006年2月, 9頁), 「15-2」では愛人(ラ・マン)対プチ愛人(ラ・マン)の息子対決がそれぞれの興行で行われた実況なしのメイン試合となった。愛人(ラ・マン)家族の物語については, 北島1997年の他, 櫛引圭太+北島行徳「障害はプロレスだ!」『漫画ナックルズGOLD特別編集 日本タブー大全』ミリオン出版, 2007年, 133-174頁に描かれている。
- 28) ドッグレッグスでは, 所定のラウンド終了後に延長戦になれば, 必ず勝戦を決める「マスト・システム」が採用されている。その際, レスラーの体重差, 障害差を考慮して判定が行われる。ドッグレッグスに入団を希望する新人の登竜門的存在である鶴園誠氏は筆者のインタビューで, 「ここ2~3年は新人さんを相手している。北島さんによく言われるのはコテンパンにしといてって。甘くないよってことを言っといってって。楽じゃないよって圧倒的にぶっ潰す。一つのエンタテイメントだけどさ, 下手にやらせとかただのショーアップじゃなくて, そこに本気があるっていうこと。本気だよ, 真剣だよってというのが伝わればいいと思うし。誰でもできる場所だけど, やる気が中途半端な気持ちじゃできない。チャンピオンだけど, 健常者と闘うときはチャレンジャーな気持ち。北島さんは, 強いて認める相手。俺が負けたら,

- 俺に負けた北島さんは弱いのかって話になっちゃうじゃん？ そう見られたくないしね」と語った。「判定に入れば勝てると思った」という言葉は、ドッグレッグスのプライド的存在としての鶴園氏による「絶対に負けられない」という思いの現れである。
- 29) ゴッドファーザー。息子のゴッドファーザーJr. は、みちのくプロレス所属。ゴッドファーザー家族については、櫛引圭太+北島行徳「障害者の父に鍛えられたみちのくプロレスラー」『別冊劇画マッドマックス』第3巻第5号，2008年3月，155-167頁を参照のこと。
- 30) 陽ノ道とともに、「聴流レスラー」として2007年より活躍し、人気を博している選手。筆者は2008年5月17日の第76回興行「障害力」において放映された映像で、「聴流」を熱烈に応援する「聴流マダム」の一人として出演した。
- 31) 陽ノ道のデビュー戦の模様は，2007年4月21日に行われた第74回興行「同類」の試合結果を記すドッグレッグス公式ホームページで観ることができる。SUPER HANDICAPPED PRO-WRESTLING障害者プロレス「ドッグレッグス」公式ホームページ，<http://homepage3.nifty.com/doglegs/result/2007/070421.html>。
- 32) 筆者は陽ノ道へのインタビューの前に，本務校にて行った講演「しょうがいしゃと夢」において講演を依頼した。講演で陽ノ道は，小中高と自らの感音声難聴ゆえに，音のない世界での身の処し方として自らの気持ちの揺れを押し殺すように時間を過ごしてきたこと。現在，学校で学んでいる写真という表現手段を得たことで，自らを「表現したいという大それた思いではなく，今は自身の中にあるものを出して出して出し尽くしたい」という思いを叶える手段を得たことなどを語った。その詳細は，拙稿「講演録『しょうがいしゃと夢——障害者プロレス，写真，TE-DEマラソン，結婚による自己実現——』『桜花学園大学保育学部研究紀要』第6号，2008年3月を参照のこと。
- 33) ロリろり太は，2005年4月16日開催の第66回興行「BODY TALK」にてデビューしたロリコンレスラーである。その詳細については，北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第113回『ロリコン』レスラーの誕生!?!」『記録』第291号，2005年2月，9頁を参照されたい。また，ロリろり太は現在，引きこもりレスラーの虫けらゴロー（虫
- けらゴローのドッグレッグス入団の経緯については，北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第87回 引きこもりレスラー成長期」『記録』第265号，2002年12月，8頁を参照のこと）とともに，「駄まともな障害者と駄目な健常者なら，駄目な健常者の方が光り輝く。それがドッグレッグスのリング」（北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第96回 迫りくる世代交代の瞬間」『記録』第274号，2003年9月，8頁）という信念の下，「聴流」の反勢力グループである「駄目流」を結成している。
- 34) 陽ノ道へのインタビューは，2008年1月15日より3月15日までにメールによる3回のやりとりで行った。また，陽ノ道によるドッグレッグス写真作品は，写真ノ介 弟umideomou.exblog.jp「2007年01月15日 障害者プロレスを鑑賞したおれはまるでところてんやこんにゃくのごとくぶるぶるのぶるぶるに成り果てて」（アドレス：<http://umideomou.exblog.jp/6337661>）にて閲覧できる。
- 35) 欲獣マグナム浪貝・サンボ慎太郎・アンチテーゼ北島「身障者VS.健常者異者格闘技バトルロイヤル座談会 障害者プロレス見参！」『本の話』第3巻第12号，1997年12月，69頁。
- 36) 北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 最終回 『障害者ととことんまで向かい合う』。成長し続けたレスラーとスタッフたち」『記録』第315号，2007年2月，6頁。
- 37) 天願大介1993年，17頁。
- 38) 北島行徳「聖人じゃない！ 人間だ！ 第90回 REASON」『記録』第268号，2003年3月，8頁。
- 39) ターザン山本「ロープワーク，流血，反則“一味の論理”とプロレス空間」『現代思想』第30巻第3号，2002年2月，33頁。
- 40) 澤野雅樹「神々の演劇 プロレスと今日の悲劇について」『現代思想』第30巻第3号，2002年2月，49-53頁。
- 41) 柿本昭人2002年2月，119頁。
- 42) 澤野2002年2月，52頁。
- 43) ターザン山本2002年2月，34頁。
- 44) オバタカズユキ「濃密な『仲間』をつくる圧倒的な信頼関係」『論座』第36号，1998年4月，258頁。
- 45) 阿部いと子「障害者と健常者による音楽表現

- 活動——ヴォルフガング・シュタンゲのダンス・ダイナミクス理論に基づく』『武蔵野音楽大学紀要』第25号, 1993年, 11頁。
- 46) 金満理「芸術の力を信じて」『教育と医学』第49巻第12号, 2001年12月, 3頁。倉本智明は、「ジャンルこそちがえ, ドッグレッグスと同じ地点から出発し, 「その先に行くものとして」, 劇団態変について論考している(倉本智明「異形のパラドックス——青い芝・ドッグレッグス・劇団態変」石川准・長瀬修『障害学への招待社会, 文化, ディスアビリティ』明石書店, 1999年, 235頁)。
- 47) 金満理2001年12月, 2頁。
- 48) ドッグレッグスにおける人間関係の濃密さを「共感性」としてとらえる論考に, 篠原加奈「障害者プロレス～その試みと可能性～——『共感』による『弱さの発展的受容』の実現に向けて」『Σvγ: ボランティア人間科学紀要』第1号, 2000年, 292-293頁がある。
- 49) ターザン山本2002年2月, 29頁。
- 50) 同上35頁。
- 51) 同上32頁。
- 52) 障害者プロレス「ドッグレッグス」のフィールドワーク研究については, 拙著『障害者の皆サマと, 闘う毎日——障害者プロレス「ドッグレッグス」外伝』(新評論)として, 近日刊行予定である。また, 本稿のインタビュー内容については, 北島行徳代表をはじめ, 中嶋有木氏, 幸堂陽道氏, 鶴園誠氏, 植木里美氏(レスラー名, 遠呂智)より承諾を得た。ここで, 厚く感謝の意を示したい。誠にありがとうございました。
- 文献一覧**
- 愛咲なおみ「障害者と表現」『トーキングヘッズ叢書 (TH series)』第29号, 2007年2月
- 阿部いと子「障害者と健常者による音楽表現活動——ヴォルフガング・シュタンゲのダンス・ダイナミクス理論に基づく」『武蔵野音楽大学紀要』第25号, 1993年
- オバタカズユキ「濃密な『仲間』をつくる圧倒的な信頼関係」『論座』第36号, 1998年4月
- 柿本昭人「光を聴け! 声を見るな!」『現代思想』第30巻第3号, 2002年2月
- 北島行徳「無敵のハンディキャップ 障害者が「プロレスラー」になった日」『文藝春秋』, 1997年
- 「伝言ダイヤルから恋愛へ。いろんな恋の形があるから, 諦める必要はないと思う。」『ダ・ヴィンチ』第65号, 1999年
- 「遊学インタビュー30 信頼関係の上にプロレスができあがった」『レクリエーション』第483号, 1999年
- 『ラブ&フリーク——ハンディキャップに心惹かれて』『文藝春秋』, 2000年
- 「障害者プロレスの愉楽」『木野評論』第31号, 2000年3月
- 『弾むリング 四角い「舞台」がどうしても必要な人たち』『文藝春秋』, 2002年
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第62回 生きざま映す試合」『記録』第238号, 2000年9月
- 「超障害日記 22」『いのちジャーナル essence』2002年3月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第87回 引きこもりレスラー成長期」『記録』第265号, 2002年12月
- 「聖人じゃない人間だ! 第88回 北島引退を決意か?」『記録』第266号, 2003年1月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第90回 REASON」『記録』第268号, 2003年3月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第91回 スターの素質の持ち主」『記録』第269号, 2003年4月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第92回 無敵の女子高生レスラー誕生」『記録』第270号, 2003年5月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第94回 『売り興行』のジレンマ」『記録』第272号, 2003年7月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第95回 地方興行の収穫」『記録』第273号, 2003年8月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第96回 迫りくる世代交代の瞬間」『記録』第274号, 2003年9月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第106回 激論! ドッグレッグスはプロレスか?」『記録』第284号, 2004年7月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第109回 全盲レスラーが北島撃破!」『記録』第287号, 2004年10月
- 「聖人じゃない! 人間だ! 第112回 リングに引っ張りあげたい『クレマー』」『記録』第290号, 2005年1月

— 「聖人じゃない! 人間だ! 第113回『ロリコン』レスラーの誕生!?!』『記録』第291号, 2005年2月

— 「聖人じゃない! 人間だ! 第122回 突然ですが, わたしは『ドッグレッグス』をやめません。』『記録』第300号, 2005年11月

— 「聖人じゃない! 人間だ! 第135回 千野の死・カッコイイ試合などなかったけれど』『記録』第313号, 2006年12月

— 「聖人じゃない! 人間だ! 最終回 『障害者ととことんまで向かい合う』。成長し続けたレスラーとスタッフたち』『記録』第315号, 2007年2月

金満理「芸術の力を信じて」『教育と医学』第49巻第12号, 2001年12月

横引圭太+北島行徳「障害はプロレスだ!」『漫画ナックルズGOLD特別編集 日本タブー大全』ミリオン出版, 2007年

— 「障害者の父に鍛えられたみちのくプロレスラー」『別冊劇画マッドマックス』第3巻第5号, 2008年3月

倉本智明「異形のパラドックス——青い芝・ドッグレッグス・劇団態変」石川准・長瀬修『障害学への招待社会, 文化, ディスアビリティ』明石書店, 1999年

澤野雅樹「神々の演劇 プロレスと今日の悲劇について」『現代思想』第30巻第3号, 2002年2月

篠原加奈「障害者プロレス~その試みと可能性~ ——『共感』による『弱さの発展的受容』の実現に向けて」『Σvγ: ボランティア人間科学紀要』第1号, 2000年

嶋守さやか『せいしんしょうがいしゃの皆サマの, ステキすぎる毎日』新評論, 2006年

— 「講演録『しょうがいしゃと夢——障害者プロレス, 写真, TE-DEマラソン, 結婚による自己実現——』『桜花学園大学保育学部研究紀要』第6号, 2008年3月

障害者プロレス「ドッグレッグス」公式ホームページ, <http://homepage3.nifty.com/doglegs/result/2007/070421.html>

障害者プロレス「ドッグレッグス」メンバー&介助者のみなさん/究極Q太郎+小倉虫太郎+神長恒一(聞き手)「自立とプロレスの両立」『現代思想』第26巻第2号, 1998年

「Super handicapped Pro-Wrestling DOG

LEGS 2007」(公式パンフレット)

ターザン山本「ロープワーク, 流血, 反則 “一味の論理” とプロレス空間」『現代思想』第30巻第3号, 2002年2月

痴呆の内部観測研究会『痴呆の内部観測研究会研究報告書』2005年度桜花学園大学特別研究費助成, 2006年

天願大介『無敵のハンディキャップ 製作ノート』青林堂, 1993年

生瀬克己「見世物芸と障害者 『見られる』存在と『見せる』存在をめぐる」鶴飼正樹+北村皆雄+上島敏昭『見世物小屋の文化誌』新宿書房, 1999年

藤木TDC「スポーツ裏の穴26 総合化する障害者プロレス」『Number』第678号, 2007年5月

ホーキング青山「ホーキング青山の傍若無人 第15回 見世物小屋によくこそ!」『創』第33巻第8号, 2003年9月

欲獣マグナム浪貝・サンボ慎太郎・アンチテーゼ北島「身障害者VS. 健常者異者格闘技バトルロイヤル座談会 障害者プロレス見参!」『本の話』第3巻第12号, 1997年12月

『Tarzan』第170号, 1993年7月

『ナイスポ』2007年12月6日